

「全体会 パネルディスカッション——地域を巻き込む——」

(高校生司会) ただいまより「全体会 パネルディスカッション—地域を巻き込む—」を始めます。

普通科分科会 岡山県立林野高等学校・香山真一先生です (拍手)

群馬県立尾瀬高等学校・峯川浩一先生です (拍手)

東京都立練馬高等学校・正木成昭先生です (拍手)

専門学科分科会 愛知県立豊橋工業高等学校・山方元先生です (拍手)

東京都立五日市高等学校・竹田克己先生です (拍手)

東京都立第五商業高等学校・藤田豊先生です (拍手)

コーディネーター・講評

常磐大学コミュニティ振興学部教授・池田幸也先生です (拍手)

よろしく願いいたします。

池田 生徒の皆さん、ありがとうございます。それでは午後4時までということで限られた時間ではありますが、今日の午前中の成果、それからまたそこでいろいろと話題になっていました課題などを前にご登壇いただいた皆さんと一緒に、それからフロアの皆さんともできるだけ時間の許すかぎりやりとりも交えながらお話を進めさせていただきたいと思います。

さて、初めに午前中の普通科分科会と専門学科分科会、それぞれ分かれてお話をしておりましたので、それぞれのところでどのようなお話があったのかを、記録をされていたご担当の方にお昼休みに急遽お願いをしてしまいましたので、ご報告をお願いしたいと思います。東京都奉仕研究会の浦部先生、よろしいでしょうか。普通科分科会のご報告を、大変恐縮ですが3分程度でお願いいたします。

浦部 広尾高校の浦部と申します。簡単になってしまいますが、紹介させていただきます。

普通科分科会、最初に岡山県立林野高校の香山先生から、総合の学習のなかで学校の外に出ていくアウトリーチ型の活動を基本になされていると。10グループに大きく分け、それをさらに32のグループに分けて、それぞれのグループでまず「出会い」。学校の外の方、地域の方と出会う、話を聞く。そのなかで生徒が「課題」を発見して活動し、「発表」する、「評価」をする、そういう仕組みで行われているということでした。

具体的には、祭の創造、生徒が獅子舞をしている画像のご紹介をいただきました。また、「黒豆つくね」という料理を生徒が提案する。地元の食材の黒豆やおからを使った料理を提案する。地元のなでしこジャパンの宮間さんが所属する湯郷ベルというチームのお弁当にその黒豆つくねを入れられないかということで、いま取り組まれているという話もありました。

学校の取り組みとして、すべての教員が係わる、組織として取り組むということを感じている学校であるというお話がありました。それぞれの先生方のなかにはいろんな思いはあるものの、学校として全体で係わるという覚悟があるということでした。

地域との係わりのなかで非常に好評を得ていて、「こんなこともできないか」「あんなこともできないか」といろんな要望があるそうです。また学校で他のボランティア活動もされていて手が回らない状態になってきた。それをどのように学校の教育活動のなかでどう整理していくかということが今後の課題であるということでした。地元の美作の「美作学」という科目を設定するということも検討されているそうです。

一方で地域の課題として過疎化、シャッター街、高齢化。「高校は学力をつけて大学に進学させるが、高校生は帰ってこないではないか」。そういったなかで「高校生のうちから地元と係わるなかで地元に根ざした活動、そして高校生が帰ってきて、将来、地元に貢献する」、そういったことを視野に入れて、この総合という科目に取り組まれているということでした。

続きまして群馬県立尾瀬高校の峯川先生からのご報告です。169名という小規模校で、唯一の自然環境科という科が設定されている学校だそうです。校内には水芭蕉が咲くなど自然に恵まれた環境であるということでした。施設も自然環境棟という非常に象徴的な棟だと私は思ったのですが、その棟には黒板がない。椅子が並んでいて、黒板がないわけです。そのなかで話のなかであったことを生徒がメモして学ぶということが行われているのだそうです。

自然環境関連の活動がその自然環境科だけではなくて、他の科と一緒に取り組めるということでした。地域活性化プロジェクトという形で取り組まれていて、1年生では地域探検をして、2年生ではその地域探検のなかから興味あるテーマを設定して調査する。3年生でそれを発表するという流れで行われているそうです。

その地域探検では「地域サポーター」というおじいさんの写真が紹介されましたが、そのおじいさんが生徒をどこへ連れていくかわからない。アポイントだけは生徒が取って、話のなかでは、おじいさんからある旅館に生徒が連れていかれて、うどんを「突然来たから食べていきなよ」とご馳走になった。教員はどこに連れていかれるかわかっていない。

そういったなかで、生徒が興味を持ったことにテーマを設定して調査・発表する。(カット)片品村のことをマンガで紹介したり、歴史について詳しく調べたり。その調査方法としてアンケートの方法も非常に詳しく指導されているということでした。

課題として、地域との調整が骨の折れる作業であるとか、職員間の役割分担に課題があるということでした。実質的に担任が中心になってこれまで行ってきたということでした。自然のなかで協同して学び合う。和気あいあいとした地域のなかで学んでいくというご報告でした。

最後に東京都奉仕研究会の東京都立練馬高校の正木先生から東京都の奉仕という科目について、その実態・成果・課題についてまずご報告いただきました。ボランティアセンターとの協力をどれぐらい得ているか等ですね。足立東高校で取り組まれていた実践や、もっとたくさんの地域貢献をさせたいという正木先生の思いをどのように練馬高校で実践されていたかというご報告がありました。職員会議等で奉仕の授業の見直しについて前向きに進まなく、様々な質問や実施上の課題が出されたそうです。その質問や課題に対して、一つひとつ丁寧に説明して取り組まれているということでした。

いちばん強調されていたのが生徒とのコミュニケーションをよく取っていくということでした。奉仕の授業でボランティアに興味をもった生徒がとても多い。それをボランティア同好会という形で発足させて、その後の活動にまでつなげるよう工夫しているとのことでした。興味をもたせ、貢献活動をしよという思いのある生徒の気持ちを拾い上げて活動を発展させていくというご報告でした。

池田 専門学科分科会は、東京都奉仕研究会の佐々木先生、よろしく願いいたします。

佐々木 東京都立五日市高等学校の定時制の佐々木です。よろしく願いいたします。まず3校の共通項目として、まずは学校と地域の特色、それから学校や各教員の思いや願いというところ、それから具体

的な取り組み、それから成果と課題という四つの共通項目のなかでいろいろ報告が出ました。

まず、愛知県立豊橋工業高校の山方先生の報告です。山方先生は以前の学校のお話をいただきました。以前は普通科の進学校にいまして、地方の高校ですと、国立大学に40名以上合格させなければいけない。そのなかで生徒にボランティア学習をさせるのは非常に大変なことである。ただ、生徒のほうはボランティアをすることがとても好きであるというところで山方先生は工夫をされていたみたいです。

現在の豊橋工業では、今年度は被災地の泥かきや、愛知に被災地から避難している子どもたちとの交流などをボランティア活動として行っているというところでした。さらにボランティアをする上での留意点としては、相手を傷つけることもあるというところから、教員自身の指導観や教育観の不断の見直しが必要であるということをおっしゃっていました。

次に、都立五日市高等学校定時制の竹田先生からのご報告です。まず学校の目標として、コミュニケーション能力の向上・育成だというところ。また奉仕の目標として、人に役に立ちたいと思うようになること、これが奉仕の目標だというところでした。

地域の特色としては、あきる野市の五日市などは、8時になってしまうと、お店がほとんど閉まってしまうので、真っ暗ななかでゴミ拾いなどをするのは非常に困難である。またその地域のなかには特別養護老人ホームがたくさんあるというところから、そのような老人ホームと地域との係わりを工夫した取り組みをしているということでした。

また生徒の特色としては、不登校の生徒が半数以上、それから社会的でない行動があるような生徒もいるなかで生徒を教えるのは非常にむずかしいところがありながらも工夫をしているというお話がありました。

1年間を前半と後半に分けて、前半は介護や防災、あるいはさまざまな取り組みをしている講師を呼んで講演会を開いて、奉仕というものは何なのかというのを生徒に学んでもらう。後半は音訳活動というものをして、特別養護老人ホームにその音訳活動の取り組みによって録音したテープを届けて、おじいさん、おばあさんに聞いてもらうということのお話をしていました。また生徒による体験発表会もあるということでした。

最後に、都立第五商業高等学校の藤田先生です。学校の特色としては、生徒は女子が80%という非常に女子の多い学校であるということでした。教科「奉仕」は「ライフデザイン・社会体験学習」と学校で名付けているそうです。また、教科「奉仕」の学習は「ボランティア」ではないと。「人との係わり、達成感と自信、思いやり、社会のルールやマナー」、この四つのキーワードを授業の中でしっかり明確化して、何を学ばせたいかを考える教師が熱意をもって取り組むということをお話していました。

また留意点としては、教師と活動先との指示等の共通理解だとか、生徒が体験活動をする際に、意欲が低いと指摘される点は、「生徒が何をしたらいいのかわからない」という現実に向き合い、活動先の方々に生徒の現状をしらせ、具体的な指示をお願いするなど工夫した取り組みをしているということをお話しされました。

教科「奉仕」では、まず国立市ボランティアセンターの方のお話を聞き、市内・市周辺の様々な活動先と連携し活動をしたり、部活動の活動として、ボランティア同好会の有志生徒が宮城県石巻市で、

夏祭り会場になる土地の土の中にあるガラス片などの除去をしたり、クラスの文化祭企画で東北地方の物産を販売することを昨年行ったそうです。そのなかで高校生の力は素晴らしいものがあると感じたということが報告に挙げられていました。

上記の被災地の活動として、第五商業高等学校の3年生と2年生の2人が実際に被災地に行った活動を通しての感想を述べてくれました。非常に心温まるようなお話をいただきました。

以上で専門分科会のお話を終わります（拍手）。

池田 ありがとうございます。午前中のご報告のなかでも、どの先生方もおっしゃっていたのですが五日市高校の竹田先生のご報告のなかに「人の役に立ちたいと思うことから始まる」というキーワードがございました。それから先ほどの堀田先生のご講演のなかにも「人の役に立つ」体験、さまざまな場面でそれがとても有用であるというお話をいただいたと思います。

そこで突然で恐縮でございますが、会場緊急アンケートを実施したいと思います。大変恐れ入りますが、ここにいる皆さま、よろしかったらご協力いただき、前の方もそちらの方も手を挙げていただきたいと思います。簡単なアンケートですので、お聞きいただいて、1人1回、手を挙げていただければと思います。

こういう質問です。「『日本中の全体の子どもたちのうち、何割ぐらいの子どもたちが人の役に立つ人になりたいと思っている』と皆さんはお考えでしょうか」。日本中の子どもたちというのは、小学生をイメージしていただいても、中学生をイメージしていただいても、高校生をイメージしていただいてもかまいません。とはいいますが、1割から全部やっていると、5年ぐらいかかってしまいますので、4択にしたいと思います。1割、3割、6割、9割、このうちのどれか一つを選んでいただいて手を挙げていただければと思います。よろしいでしょうか。今日は決断力のある方ばかりですので、早速、手を挙げていただこうかと思います。

日本中の子どもたちのうち、人の役に立ちたいと思っている人は何割か。

少ないほうからいきます。1割だと思いの方、どうぞ。はい、1名の方。ありがとうございます。3割ぐらいではないかと思いの方。はい、4名です。はい、ありがとうございます。6割ぐらいではないか、6割ぐらいいてもおかしくない。18名の方。はい、ありがとうございます。いや、9割ぐらいいてもおかしくない。はい、20名の方。素晴らしい結果が出ました。発表いたします。1割の方、1名。3割の方、4名。6割の方、18名。9割の方、20名でございました。

この質問は、私、ここ10年以上、いろんな機会にさせていただいておりますが、大体3割と6割が二つの山になって人数が多い傾向にあります。今日はさすがですね、この会場においでいただいている方々は6割と9割が山になりましたね。18人と20人ということで多めだったということです。

これは皆さん、ご承知のように調査の結果があります。文部科学省が学力調査のなかでもこのクエスチョンがありまして、「人の役に立ちたいと思えますか」という問いがあります。またこれはそれ以前、学力調査が全国一斉で行われる以前は総務庁が行ったりしておりまして、結論は「小学生も中学生も9割以上の子どもたちが人の役に立つ人になりたいと思っている」という結果でございます。

これは、信じられないと思う方にはこういうふうに問いを変えたいと思います。こういう問いです。「皆さん自身は人の役に立つ人になりたいと思えますか」という問いです。「そう思わないという人、ハイ」というので、手を挙げるのはなかなか勇気が要るといえるか、何らかのポリシーが別に必要かもしれないということですよ。

つまり、常識的に考えても、人は人の役に立つ人になりたいと思っているということ、学校の先

生方も保護者の方も想像しにくい状況にあるということがあるのではないかとということなのです。そこにいろいろな取り組み、または課題に対するチャレンジがあるのかなと思っていますところ。

さて、そこで6人の方にお待ちいただいて恐縮でございますが、「人の役に立つ」というこれをキーワードにさせていただいて、それぞれ取り組まれていらっしゃる事例、またはご経験のなかから、生徒たちが人の役に立ったかどうかはどちらでもかまいません、人の役に立つというチャレンジ、体験をしていくなかで印象に残っている出来事、エピソード、場面を一つで結構ですので、ご紹介をいただけたらと思います。

それでは、香山先生からよろしいですか。お願いいたします。

香山 林野高校の総合的な学習の時間というのは、3、4年ぐらい前までは体験をして地域の方に喜ばれて「面白かった」「楽しかった」、特に「楽しかった」という感想がいちばん多かったのですね。課題解決型学習に変えて、シャッター街が増えているその地域、少子化・過疎化の地域のなかで、高校生だけでも、地域に何ができるのか、地域の課題を考えようという形で一步、総合学習を進めたのですね。

そうすると、例えば平成の大合併でできた美作市は、例えば職員の数が多すぎはしないかという発見をするのですね。「職員の数を減らすことによって税金を違うところにもっていく、特に社会福祉のほうへもっていくといったことが必要ではないか」という提案を発表会でやるのです。

そのときに聞いてくださった地域の方が「この発言はぜひ市長に聞かせたい」とお褒めをいただいて、いわゆるペーパーテストの学力は決して高くない生徒だったのですが、そこから俄然、勉強に対する意欲が湧いて、いますごく前向きに生活しています。「将来、自分は美作市を背負って立つのだ」という思いをもって活動しているという非常に大きな変容が見られています。それは私のなかで支えになっています。

池田 はい、ありがとうございました。いまのお話はその生徒さん自身の取り組み、それが報告して評価をされて、またそこで地域の方との出会い、地域の方々からの評価、そして生徒自身の自分の有り様を見出したという事例。その役に立つというのが一つの中身ではなくて、生徒自身にとってもそうですし、地域の皆さんにとってもという双方向の有用なあり方というのがそのなかに見られたということですね。ありがとうございます。

お待たせしました。峯川先生、お願いいたします。

峯川 役に立つエピソードということですがけれども、いま香山先生がおっしゃったように、地域の課題を見つけて、それを具体的に、例えば解決に結びつくような提案ができるということが探求活動のなかでできれば、まさに役に立っているということだと思のですけれども、うちの学校でそこまでの成果をあげたということはなかなか正直なところないですね。

ただ、極論を言うようですがけれども、地域における高校生の存在自体が結構、地域の役に立っているところもあるなと思っています。群馬の北部のほうで「おまえたち」ということを「にしゃあ」と方言で言うのですけれども、うちの生徒がフィールドワークなんかに出ていると、「にしゃあ、何やってんだあ」とか言って畑で作業しているお年寄りなどが寄ってきて、「こういうことをやるのだ」と言うと、「それでは、こういうことがあるから」とか、「では、ここへ寄ってけ」とか、そういうことになっていくような展開もなくはないわけです。

若い高校生が過疎の進んだ地域に出ているいろいろやるといふなかでのさまざまな方との交流というのですか、そこで具体的な何か成果があるわけではないのですけれども、そういうやりとりそのものが地域に与える明るい部分というのはあるのかなと感じています。

池田 はい、ありがとうございました。高校生という存在そのものが地域社会にとって大きな意味があるということ、高校生自身も知る機会になる。これが日常のなかではなかなかないかもしれないというご提示だったと思います。ありがとうございました。

それでは正木先生、お願いします。

正木 先ほどの堀田先生のなかで「非行少年を社会奉仕活動させるプログラムがとても効果的である」というお話があったかと思うのですが、東京都の奉仕体験活動も、そのプログラムとは違いますけれども、教科として行う活動のため外に出ていくことが想定されます。

奉仕は平成19年に導入後、今年5年目です。私は前任校からパイロットスクールとして前倒して2年間やっているので7年間やっています。授業で強制的に外の活動に行かせるので、「行きたくない」「早く終わらせたい」「めんどくさい」と思っている生徒が多いのです。しかし、実際にこのような授業を体験させることによって、「あっ、何か自分がイメージしたものと違うな」とか「またやりたいな」「また体験したいな」という気持ちに変わっていく子どもたちもいるのです。

これは前任校でも、練馬高校でも生徒の変容が大きく見受けられます。先ほど浦部先生からもちらっとボランティア同好会を立ち上げましたというご紹介をいただきましたが、夏休みに部活の生徒を集めて、「防災マップ」を作っているのですが、その活動の中で実は卒業生が数名「一緒にやりたい」と手伝ってくれています。この3月に卒業した生徒なのですけれども、後輩に「防災マップ作りがあるって聞いたのですけど、自分たちも参加していいですか」ということで問い合わせがあり、一緒に地域を回ってくれたのです。この行動力は、練馬高校の生徒のすごいなと思うところでした。

そういった取り組みが実は練馬高校ではできるといふことに自分はすごい感動を覚えて「奉仕やボランティアの可能性には、このようなどころもあるのだ」と、逆に自分自身の新たな発見にもつながったかなと思っています。

池田 はい、ありがとうございました。卒業生も一緒にという広がり、つながりがある。これは学校、そしてまた在校生のみならず、そこに広がっていくということですね。ありがとうございました。

それでは山方先生、お願いいたします。

山方 県の青少年健全育成事業があつて、県が青少年ワーカーを育成する講座を受けた大学生が子どもの活動を担任して実践する。その活動を予算がつくからやってくれというので、ある市長さんが市に持って帰ったら、その町には青年団もないし、若者のNPOもないし、活動する場がない。そこで、うちの学校に持って来て、「なんとかしてくれませんか」と相談に来たのです。

ボランティアの担当の顧問と相談してやろうとしたら、よその地域から若者が来て、市の担当はその若者がつくったプランに基づいて高校生にさせて終わった。その内容というのが、生徒がいろいろ案を出すわけです。「ここはこうしたほうがいい」と言うのですが、全部ボツで却下。さすがにこれはいけないと担当職員・若者と話をして、高校生のやる気や意欲を引き出して、高校生が子どもに係わる仕組みにする。みんな子どもが好きなのです。自分が楽しみたい、子どもと遊びたいので。

「あなた（若者）の役割をちょっとシフトして高校生を育てる役割に変えましょう。周りはその学生を支えましょう」とやっていったら、高校生もやる気がどんどん出ますけど、若者も自分の新しい役割に気づいて意欲が出る。

そうしたら、生涯学習課の公務員の方々もやる気が出てきて、「私はこういう仕事をしたかった」と気づき、地域の人も「高校生と一緒にしたかった」とか言われ、関係者みんなが役に立ちたいと思っているのですね。多くの人がそれぞれ役に立つ連鎖ができて、とても印象的でしたね。

生涯学習課の人も「この事業は続けたい」と言われ、2年目は県を一生懸命駆けずり回って予算をもらってきた。さらに生涯学習課の方々も「これが自分たちの本来の仕事」とか言われ、3年目は市の事業になりました。だから高校生のやる気を引き出すというだけでずいぶん変わることもあるなどというのがありました。

池田 はい、ありがとうございます。そうですね、役割を見出して、それを担うということに係わりだすと、それが波及して行って、行政も必要なものをしっかり位置づけたりする。これはボランティア活動でも、ニーズに行政が追いついていない部分をボランティアが担って、やがてそれが制度になっていくというのはよくあります。長い歴史のなかでそういうことが見られるわけですけども、そういうことが子どもたち、生徒たち、若い人たちの学びや学びの循環、つながりのなかにもあるのだなというお話と伺いました。ありがとうございます。

それではお待たせしました、竹田先生、よろしくお願いします。

竹田 役に立つということですが、私は都立の五日市高校定時制で、先ほどまとめの紹介にあったと思うのですが、半分ぐらいの生徒はともかく中学のときにいじめられたりしていて、これから話す生徒さんもその1人なのですが、本校の取り組みは事前学習で必ず「講師講演会」を実施しています。昨年度は5回実施しました。

今年、講演会を開いて、全盲の方に来ていただきました。その方に常に付き添っていくような形で盲導犬がいるわけですが、その犬を連れてきていただいて、いろんなお話をしていただきました。

その話を聞いて、いつも中学校のときいじめられて下ばかり向いている子が感想文に「人生の暗闇のなかから明るい光が見えた」と書いたのです。いつもはそんな発言をするような子ではないのですが、そう書いたのですね。それから半年ぐらいの間は、僕もその子に何か話しかけようかなと思ったのですが、あまり人と話すのが得意な子ではなく、半年ぐらい経ってからですか、その子が「実は将来、ボランティアの仕事をするとか、あるいはホームヘルパーのような仕事をするということをするにはどうしたらいいだろうか」と相談に来たのです。そしてその方向に勉強をいたしました。いままで国語、数学、基礎科目がぜんぜんできなかつた子が、先生のところに行って質問したりして何かちょっと変わってきたのですね。4年後にそういう方向の道に進んで、いま現在、ホームヘルパーの道に就いています。

ですから、それを狙ったわけではないのですけれども、これがやはり奉仕活動というか、ボランティア活動なのかなと。こちらは別にそれを目指しているわけではないのですけれども、講演会のときにその道で長けた人を呼ぶわけですね。そういう人の話を聞きますと、その話を聞くことによって、先生方とか親が話している内容というのはもう聞き飽きているのでしょね。外部から何か長けている方が来て、ぱっと一言、二言喋るだけで、やはり違うのでしょね。で、「あつ、おれ、いじめられたけど、ちょっと自分なりにチャレンジしてみようかな」という気持ちが起きるのでしょね。

それがそういう道に行ったのかなあとと思います。

本校はわざと1年生でこの奉仕活動をやっているのです。本来は、全日制では2年生ですとか定時制でいえば3年生あたりに持ってくるのですけれども、わざと1年生にやってみて、教員は非常に大変なのですけれども、外部の人たちに来ていただいて、あるいは音訳活動で6人、多いときは10人ぐらい、音訳の指導をしていただく地域の方に来てもらいます。そうすると、最初はふてぶてしくしていたのが、外部から来た年配の方なんかには習いながらやっていると、心を開いてきますね。

だから教育というのは、教員がやることはもちろん大前提なのですけれども、そのアプローチの仕方というのはいろいろ考えながらやっていると、思いもよらない結果が出るのかなあ。特に定時制あたりは、先ほど言いましたように半分は不登校だった。中学のとき、本当、2、3日しか行っていないとか職員室登校だとか、先生方、ご存じですが、保健室登校とかそんな生徒が結構多いのですよ。

あとは、全日制にいて非常に元気で良すぎて、それでぐるぐる回ってきたという生徒さんもいて、いろいろな生徒がいるのだけれども、まあ、話が長くなって申しわけないですが、人の役に立ちたいと思うことというのは、先生方が導くよりも、そういう舞台をつくってあげると、そういう方向に行くのだなと思いました。以上です。

池田 はい、ありがとうございました。具体的なケースを紹介していただきましてありがとうございます。人の役に立つことを何か用意していたというよりは、さまざまな方がお話をしてくださるという機会を提供していて、そこから本人がキャッチしたもの、そこがいま最後にお話された役に立つ社会的な役割、職業、または自分の学ぶ意義みたいなものを見出した、そういうチャンスを与えることができるという実感をお持ちになったということですね。ありがとうございました。

それでは藤田先生、お待たせしました。よろしくお願いします。

藤田 第五商業高校の藤田です。生徒が人の役に立ったかどうかは、プログラムを企画する私からは「このプログラムをとおして、生徒は人の役に立ったか」わかりません。ただ、生徒が何を感じ、変わったのかもしれないという話だったらできるかなと思います。生徒が変わったかなということ言うと大きく二例あります。

まず一例目は、劇的に変わったということです。

それは今から12～13年前、前任校で、まだ指導要領のほうで福祉という教科がないときに、生徒に少しでも社会に目を向けたり、自分のことに目を向けたり、自分に自信をつけてほしいということで、地元の青梅市ボランティアセンターの職員の方と一緒に福祉の授業を作りました。具体的には、選択科目で、学校設定科目「社会福祉入門」という授業を行った際の例です。

当時、福祉の授業は、いくつかの学校で取り組まれていましたが、2、3回の授業である単元が終了するパターンが多く見られました。視覚障害2～3回、聴覚障害2～3回、下肢の障害2～3回。2～3回ではその人の生き様などいろんなことを知らないうちに次の単元に進んでしまいます。そこでボランティアセンターの職員と検討し、学習内容を絞り、一つのテーマで6回ぐらい授業をやることにしました。

車椅子の方と一緒に学ぶ授業では、一緒にお買い物をしたりや電車に乗る授業を行いました。その単元の中で、実際に人が車椅子に乗った状態で、階段を生徒4人で人を上げたり下げたりする学習を毎年行っていました。

ある年のその授業の際に、ある女の子が、階段の柱にしがみついて「絶対やらない」と言ったので

す。この女子生徒は、あまり乗り気ではなく、単位の関係で選択せざるを得なかった生徒であり、あまりやる気もない生徒でした。私は普段はヘラヘラしているのですが、そのときは「うるさい、やれ。絶対、やれ」と言ってやってもらいました。実際、やるって、恐いですよね。落ちてしまったら、その方も大変だし、私もクビだし、本当にもう紙一重の授業なのです。

それで、終わりました。うまくいったのですね。うまくいかないと困るのですが、その子はそこから劇的に変わりました。盲老人ホームに就職して働いています。そのようなことでちょっとした他の人とのふれあいとか経験というので劇的に変わるのはすごいと思いました。たぶん私が、このようなボランティアに関する授業などを継続している原点の一つかもしれません。

もう一つ。内面的に変わったというのが、去年の2年生のうちのクラスでやっていた文化祭の催しです。去年、クラスで東北のものを売ろうという企画をしました。生徒たちは「できないよう」とか「めんどくさいよう」とか結構あったのですが、私が何回も現地で活動をしていて、生徒に対して「こうだったよ」「ああだったよ」と、おみやげを配りながら話をしていたら乗り気になりましてやることになったのです。

その中でいろいろとボランティアセンターの話を知りました。そんなときに普通の女子生徒どうしが「ものを売るだけでは、ちょっとさあ、だめじゃん」「そういえば、この間、うちの近くのイベントで東北出身の写真家の方の写真が貼ってあったよ」「それ、もしあれだったら教室に張ってもらったらどう?」と話し合っていました。

私が「電話、電話、電話!」とジェスチャーをすると、実際に電話をしたのですね。初めは電話しないだろうと思ったのですが、実際に電話をして、写真家の方が承諾してくれました。

クラスの文化祭って、いろいろな生徒がいます。部活動ではありませんので、「そんなの面倒くせえよう」と言う人がいたり、目一杯やりたい子がいたり。

実際に、文化祭の前の日にその方たちが写真を持って来校してくれました。写真を見ながら現状の説明を聞いていたのですが、話の途中の頃には、他のクラスは帰っています。通常なら、いち早く自分たちも下校したいのに、生徒はシーンと聞いているのですね。話の途中、校内放送が入りました。するといつも「うぜえよ」と言っている男子生徒がパッと放送のスイッチを切っていくのですね。それを見たもう1人の男子が「ナイス」とか言っているのです。「あっ、この子たち、ひょっとしたらすごいかもしれない」と思ったのですね。

そんなことをして、文化祭のクラスのまとめ役の生徒に「これだけ、みんな一生懸命やっているのだったら、写真を撮って、それで新聞社に『学校に来て下さい』とかってメールしたら? まあ、1割ぐらいしか来ないけどね、まあ5%かな。まあ、いいよ、どっちでも」と言って下校させました。すると、夜9時ぐらいに「こんな文面でいい?」と連絡がきました。「いいんじゃない?」と返信をすると、本当にそのメールを新聞社に送ったのです。そうしたら次の日に新聞社が来て生徒たちはびっくりしていました。そんなようなことで生徒は「ひょっとしたら私たちがやっていることって世の中の役に立っているのかな」とちょっと思ったようです。

お客さんに物品を販売したのですが、買ってもらうだけではなくお客さんにメッセージを書いてももらったのです。そのお客さんにメッセージ書いてもらったものを、送るだけというのはあまりよくないのではないかと、生徒も精一杯取り組んだなと思い、次の週末に私が仙台に持って行きました。そうしたらまたその仙台のいろんな工場の方とかは本当に喜んでいただいて、嬉しくて涙を流しているのです。

その時の状況を生徒に説明し報告資料を配布すると、生徒たちは一生懸命読んでいました。生徒た

ちは、何か役に立てることはないか考えつつも、何をしたらいいのか分からず、一步踏み出すことができないが、生徒はすごい力を持っているのだなと思いました。

今年の文化祭はどうなるかと思っていたら、今年は調理をしたいようです。「何やってもいいよ」と言ったら、「焼きそば」をつくるとのことでした。

私が話をすると「また東北って藤田言うんだよな」と思われてしまい、自主的な動きにブレーキをかけてしまうので、なるべく私は席を外すようにしていました。いると、私、言いたくなってしまうから、「いいよ、いいよ、好きにしろ」と言っていたら、「今年は福島県の浪江焼きそばをつくる」と言いました。

幾つか私も例示はしたのですけれど、そうしたらそのなかでそれをつくるというので、あっ、これはひょっとしたら生徒たちは自分もみんなの役に立ったと思って、そんなに劇的に変わっているわけではないけど、いざというとき動いてくれるのかなと思って、私もちょっとこの後、どうなるか楽しみにしているところです。長くなってすみません。

池田 はい、ありがとうございました。藤田先生のいまのお話、皆さん、どのようにお聞きでしょうか。やるって、場面だけ取り上げれば先生が強制といえば強制ですけれども、肩を持つとか背中を叩くとかいろんな事態があると思うのですけれども、そのタイミング、それによって本当にスイッチが入るか、自ら生み出されてしまうという場面のお話がいま幾つかあったのだと思います。また藤田先生と生徒さんとの関わり方、いろんな距離感が必要というご指摘をいただきました。

いまの最後のお話のなかでありましたけれども、例えば新聞とか、場合によってはテレビとかいろいろあるかもしれませんが、そういうメディアに生徒たちの活動が取り上げられた経験をお持ちだという先生方、どうぞ、どなたでもご発言したい方で結構ですが、そのことの意味とか、または課題がもしあれば課題とか、何かお感の点。藤田先生は生徒に「メールして連絡しろよ」と勧めたということですが、

メディアに生徒たちの活動が取り上げられた経験

藤田 今回のことは生徒がやったので、私が「どう？」って言ったら初め難色を示したので、「ああ、じゃあ、もう好きにしろよ」と言っただけですので、あまり期待はしていなかったのですが、生徒はすごく自信がついたようです。自分たちのやっていることが社会に認められたと相当思ったみたいで、いろんな意味で、普通の生活はすぐダダるのですけどね。だからちょっと「はっきりわからない」と言ったのはそういうことなのです。普段はグダグダしているのですけど、でも、生徒は「自分たちは役に立った」って相当思った。新聞を見てまたお客さんも一杯来てくれたのです。なので、すごく役に立ったと思ったということではいいかなと思いました。

池田 ありがとうございました。竹田先生はいかがですか。

竹田 そういう新聞などに載ったこともあって、うちの学校は東京の西のはずれなものですから、どうい学校かなということがまだわからないところはあります。それで地方新聞でも載りますと、それが募集対策にもつながる。これは結果論なのですけれども。

なぜかという、そういう新聞なんか載ると、定時制って偏見を持つといっちはあれですけども、「定時制の生徒でも頑張っているのだ。こういう学校があるのだ」ということがわかると、その

地域の中学校の先生とか保護者の方が「あっ、落ち着いている学校ではないのかな。こういうことができるという学校は荒れていないのではないかな」。実際にそんなに荒れていないものですから、そういうイメージが出ますね。

それと合わせて、そのときに新聞なんかに生徒がコメントで載ったりとか、集合写真で載ったりして「ああ、私が出ている」とかいうと、またそれは自信につながりますね。それが一つ出ると、1年生でやるわけですから、また新しい1年生が入ってくる。あるいは先輩たちがそういうのを見て、「ああ、うちの学校はこういうふうな形で評価されているのだな」というところがあります。だからなるべくそういうふうなことをやったときに出るといいかなとは思っていますけど、それは結果論であって。

ただ、目立つようでもまた良くない。奉仕活動とはそうだと思うのです。自己満足でこういうふうに行ったなんていうので終わるのではないというのがありますので、うちは特に定時制で地道に、地道にやっていく、それでいいのだと思うのです。あまり目立ちすぎてもいけない。生徒はそれが目的なのだ、みたいな感じに捉えると、結局、奉仕ではなくなってしまうと思うのです。だからそのへんを注意しながら、とは思っていますが、宣伝のアピール活動になるのは事実かなと思います。

池田 ありがとうございます。山方先生、お願いします。

山方 管理職とか周りの多くの先生になかなかボランティア活動とかは理解してもらえないのですね。新聞というのは広告ではありませんので、こっちが掲載料金を払って書いたら宣伝ですけども、新聞社とかテレビ局の人に来てもらって撮影したり、放送してもらおうと、中身はこっちは介入しませんので、第三者の目を通して、それで生徒も自分たちのやってきたことがそれを通してわかりますし、何よりも反対する人も減っていきますので、こういうことの意義を伝えるにはわかりやすいかなと。

一つだけ生徒のために活用したことがありました。「将来、ジャグラーになりたい」という子がいて、私はそう思わなかったのですが、特にイケメンと評判だった生徒です。いろんな番組で取材が来て、その子の活動の場所とかを情報発信すると依頼が来ました。「こういう人がある」とか「こういう学校だ」というイメージが立つと。ただ、あんまり取材が多くなりすぎたので、管理職のほうから「こんなことばかりする学校と思われる」とかいって怒られましたけど。

池田 はい、ありがとうございます。もしいまの関連のことでお話になりたい方がいらっしゃればということで、よろしいですか。では、峯川先生。

峯川 メディアということなのでですけども、先ほどお話ししましたとおり、自然環境科という学科自体が珍しいので、すごくよく取り上げてもらっているというところがあるのですね。なので、ちょっと生徒も職員も慣れているというのが一つあります。新聞や地元のラジオ局に出たりする。新聞といっても地方紙ですけど、出るとのことだと、「ふうん」という感じというのが一つはあるのいいのか悪いのか、そんな状況もあるということ。

あとは、個人的には新聞に取材に来てもらおうと、「ああ、これ、ちゃんとやらなくてはな」って思うというプレッシャーは正直あります。地元の方などが「ああ、またこういうことをやっているのか」と見て、礼状を書かせるのが遅れたりとか、あるいはまとめなんかがあるんなら行事に挟まったりすると、ついでにがしろになることがあるのですけれども、「これはちょっと、ちゃんとやっておかない

となあ、問い合わせあったらいやだな」とか、いろいろそういうプレッシャーを感じてやるという側面もあるなと思いました。

池田 はい、ありがとうございました。生徒たちが取り組んだ成果を発信するということによって、またはそれが生徒たち、まあ、先生方もそうかもしれませんが、社会的にいい意味で評価されるという、これも重要な一つのきっかけ、または展開になるのかなあと。それを意図的ではなかったとか結果としてというのは何回もいろんな場面で出ていますけれども、そここのところが大事なのかなあとお話を伺って思っていました。

さて、ここでフロアの皆さんからももし何かご質問やご意見、ご発言したいことがあればいただきたいと思います。それではお願いします。

意見1 恐れ入ります。峯川先生のおっしゃった「地域に出ることで、それがボランティアだ」と。私もそれは感銘するのですが、高校生とか若い人の存在そのものがボランティアというか、町に出て活躍するということは本当に勇気を与えてくれると思うのです。

ところが、私も教育関係者ですが、我々が反省すべきは、子ども本来が持っているもの、皆さんも9割方、そういう奉仕活動についてやりたいと思っているというのがありましたね。堀田先生のお話にもありましたけれども、それをそうさせないほうに持っているというのは私、教育の大きな問題だと思います。

だからどうボランティアの気持ちを育てるかというよりも、どうしてそんなつぶしているのだということですね。だから私たちはそういう気持ちを価値づけてあげなくてはいけないと思うのです。特に中学校関係者の方がいらっしゃったら申しわけないのですが、いわゆる校則や生徒指導というものが子どもを追い詰めているのではないのかと私は思うのです。

中学校の先生がよく言いますが、公園に中学生、何もしないでいるだけなのに、電話が来る。「中学生が屯している」「何をしている」「何もしないで屯している」。いるだけで不気味な存在になってしまっている。子どもの良い面を価値づけてあげるのが教育なのに、そういうものをつぶしていやしませんかということですね。

Q1 都立南平高校の教師です。私、前任校でやはり奉仕体験活動をゼロから立ち上げたということがあったのですが、先ほどの堀田先生のお話でも、やはり自己肯定感というのがすごく重要だというお話があったと思います。

私も今日のディスカッションのテーマから「地域を巻き込む」ということを考えると、私は日野高校で前任やっていたのですが、最初に意義づけをやって、次にあえて地域の清掃センターと連携を取って、多摩川が近かったもので、清掃活動をやらせたのですよ。そのときに生徒が、自分たちが迷わないようにということで、わざと「日野高校」というのぼりを立てて、ずうっと行進しながらゴミを取っていったのです。そうしたら、それを見て地域の人たちからの、先ほどの話ではないですけど、「ありがとう」とか「頑張ってるね」という声を聞いて、生徒たちにアンケートを取ったら「嬉しかった」という言葉が出てきたのです。

その「嬉しかった」という言葉とともに同時に出てきたのが、清掃活動というのはゴミですからモノが相手ではないですか。ところが、それに対して、私ももともと計画立てていたのですが、まさかそこまで効果が出るとは思わなかったのですが、「今度は人を相手にしてボランティアをやり

たい」、こう出てきたのです。そういったことによって地域の方を巻き込むとか、いろいろな福祉の
関係の方を巻き込むとか、そういったことができたわけなのです。

そういった面で、私、午前中の分科会で香山先生のお話を聞いていて、本当に管理職の立場も非常に重要だし、学校の環境といったことも非常に重要だと思うのですが、やはりいかに地域を巻き込んでいくか。そのポイントがそれぞれの学校の先生方でどのように工夫をされていたのか。今日のテーマにもう一度戻ってぜひお聞きしたいのですが、よろしくお願いいたします。

池田 はい、ありがとうございました。地域との係わりについて、後段、皆さんから一言ずついただくことにしたいと思います。続けて質問をお願いします。

Q2 文部科学省の教科調査官をしています。たぶん関係するかと思うので二つほどと思います。特に香山先生に伺いたいなと思ったのだけど、一つは、さっき藤田先生が言ったみたいに、子どもがいろんな人と触れ合う、そのことによって人の役に立ったということを実感するかもしれないという子どもの実感が生徒を変えていくのではないかと。そのことがおそらく進路にも結びつくだろうし、学習意欲にもつながるといってお話があったのだけれども、おそらく、ただ経験すればいいという話ではないのだと思うのです。つまり、その経験したことをどう学校の子どもたちの学びとして、私たちがまさにプロの教師として仕立て直すかというか、学校の学習としてうまくコーディネートするかって実はすごく重要なことかなと思っていて、そういったご苦労というか、工夫がきっとあるのではないかなと思うので、その辺りの話が伺えればというのが一つです。

二つ目が、子どもたちが得る果実の話がいま出ていますけれども、逆に人の役に立つということは、さらに私は超えていて、地域の役に立つとか、あるいはもっと地域の活性化につながるだとか、さっきの話でいけば東北の復興につながるという話になっていくのではないかと。そのときに先ほど峯川先生が「その存在自体が重要なのだ」とおっしゃったこと、あるいは「役に立つ連鎖が広がっていったのだ」という山方先生のお話がとっても何か意味が大きいかなと思うのです。

つまり、高校生だからこそこできることがあるという気がするのです。これって、大学生もどうもできなくて、中学生もできないのだけれども、高校生が社会に出ると、どうも社会の大人たちは小・中学生以上に非常に活性化するし、あるいは大学生以上に地元の子どもであるという良さがあるような気が私は非常にしていて、各地がある意味、疲弊している地域があるなかにあっては、僕はこの高等学校の子どもたちが地域に出て、地域の人とかボランティアの人と色々な形で関わってもらうことが、これからの日本の社会をつくり変えていくということにものすごく大きくつながるような気がしているところがあるのです。もしそういうふうな視点でのご示唆があればお聞かせいただければと思います。

池田 はい、ありがとうございました。お2人のご質問から、またご指摘から後段、残された時間で登壇者の皆さんにお話をさせていただこうと思います。地域を巻き込む、または地域といかに協働するかという視点ですね。それで何をしたかというよりはそのことについてどのようにお考えをお持ちかということ。

そしてもう一つ今ご質問いただきましたけれども、学校で生徒たちの学びの成果をいかに位置づけ、意義づけていくのか。またはそれをさらにもっといざばどう発展させていくのか、社会に還元していくところにつなげていくのか。その評価と学びの広がり、発展のところを含めて、かなり広いテーマ

ではありますが、それでは香山先生からお願いします。

香山 ハーバード大学の医学部の教授でポール・ファーマーという人がいるのですね。この方は世界的に有名な結核撲滅運動をWHOを巻き込んで世界的に展開して、いま生きている人類のなかで非常に優秀で、かつ社会貢献意識が非常に高い人なのです。1959年生まれなのです。私も1959年生まれで、「こんな人がいるのか」と思っています。ハーバードにいながらハイチに入り込んで結核撲滅運動を展開して、それがいまやもう全世界に広がっている。

そういうポール・ファーマーのようなグローバルな課題にぶち当たっていく、そういう人間を育てたいのですけれども、いきなり高校生がそういう大きな問題にぶつかるというのは簡単ではない。なかにはいろんな募金をしたりして、それで貧困なところで学校を建てるとか、そういうことをやっているところはあると思うのですが、まずはやはり身近なところで発見をしていく。自分の身のまわりの本当に些細なところからでいいから、何か変えようという提案力を身につけさせる体験をさせたい。そのときに地域の方々に喜んでもらえる課題を生徒たちから出るような仕掛けをする。この地域の身近な人に喜んでもらえる課題を生徒のなかから出るような仕掛けをするというのが一つのポイントですね。

もう一つは、堀田先生のご講演のなかで、「非行少年というのが学校の競争に敗れ、親に疎んじられた」といったような一つのご示唆があったわけですが、テストで点数化された仕組みのなかで評価をされる。我々は決して「競争」という言葉を使いたくなくて「切磋琢磨」と言っているのですけれども、生徒はえてして「競争」という意識でそれを捉え、点数が高い人は勝ち組、低い人は負け組と思い込んでいる節がどうもある。そういうなかで疎外感が芽生えたりするという。

でも、実際は人間って勝ちも負けもない。いろんな職業があって成り立つわけで、単にテストで序列化されていると思込まされている、そういう世界観を変えるということ。それにはやはり課題解決学習というのが非常に有効であるということ。そしてそれをいろんな方に評価してもらって、大人に評価してもらって「すごいね」って褒めてもらう。これはテストで100点取る以上の価値があると思うのです。そういう仕掛けをうまくしてやるということ。ヨーロッパでは「パフォーマンス課題」とか「パフォーマンス評価」とかという形で、日本の文科省もいま注目している評価の方法ですけれども、そういった仕組みを入れていく。

その二つを総合的な学習の時間を中心に入れていって、課題を介して人間関係が成立していくという仕掛けをつくる。これは、三つ目の工夫なのですが、仲の悪い子たちに「仲良くしろよ」と言ってもこれは無理です。特に女の子は、小さな集団をつくりがちなのですね。ところが「この課題を一緒にやろう」となった以上は、好きだろうが嫌いだろうが、その課題を手を携えてやらなくちゃいけないという仕掛けをつくっていくと、人間関係がずいぶん良くなって、結果として、結果を大人に喜んでもらえる、そしてプロセスにおいて友だち同士で自己有用感なり居場所づくりができる。そういう三つの仕掛けを意識して総合学習に取り組んでいるところです。

池田 ありがとうございます。それでは続いて峯川先生、お願いいたします。

峯川 地域との係わりで心がけたことですか、高校生が地域と係わることについてということだったかと思います。誤解を恐れずに言うのであれば、ちょっと失礼ぐらいがちょうどいいとでも言ったらいいでしょうか、先ほど午前中の分科会でも少しお話させていただいたのですけれども、教員が指導

すると、非常に失礼があつてはならないとか、あとは、依頼というのは電話で内諾を取って、その後、文書を出すものとか、いろいろ考えてしまうのですね。

高校生だから許される部分の一つとして、例えば「先生、実は今日、フィールドワークに行きたいのですが、連絡取ってないのですよ」とかいうことがあるのです。そのときに「ああ、じゃあ、おまえ、すぐ電話してみろ」と言ってみると、「何？ 今日、急に来るんかい。だけど、尾瀬高の子が来るのじゃしようがねえ、準備するか」って嬉しそうに言う人がいるみたいなどころであるのですね。

もちろんしかるべきところにはしっかりした対応が必ず必要だと思いますけれども、あんまり形式張っているとか、あるいは失礼がないようにとかいうことを考えすぎると、フットワークというか、ダイナミクスさみたいなものが失われて、今日いろいろお話に出てきた地域と係わるなかで得られる本当の大切なところが得られにくくなると思うのです。なので、失礼ぐらいがいいというのは大変失礼な言い方ですけども、少しラフなほうがうまくいくというのがここ数年の実感かなと思っています。

池田 はい、ありがとうございます。それでは続いてお願いいたします。

正木 経験したことをどうコーディネートするかということですが、私自身は授業やその他の特別活動等を通して部活動につなげていけたらいいなと思ひ、そのための準備をしています。

ただ、体験学習など外部とのやり取りが必要な活動をコーディネートしていくためには、これに係わる先生方にそれなりの力量とか知識がないと難しいのではないかと思っています。それと同時に1人、2人の先生がやることによって、十分にまかなえるとは思わないので、ある程度、チームを作っていくことが重要であると思ひます。ですので、このコーディネートの部分はすごく難しいのではないかなと思ひます。奉仕を進めていく上で、悩んでいる先生や思いを共有できる環境としての“場”を確立していこうという趣旨のもと、この東京都奉仕研究会というのが出来上がったという経緯もあるので、そういったところにつながってきます。

また、地域を巻き込むというところに関しては、まだ練馬高校は今年3年目なのですが、巻き込んでいる実感はまだないです。これから先、進めていかなければいけないことかなと思ひます。

ただ、一つ言えるのは、地域もそうなのですけども、PTAという組織を大切にしていけたらいいのではないかということです。PTAとの関係を良くして、まずそこをきっかけとして地域との信頼関係に結べると思っています。というのも前任校の経験なのですけども、私が赴任した当初は地域の方から「あの学校はだめだ」と廃校運動まで起きていた学校でしたが、生活指導の徹底、PTAの方の協力、地域の方の協力を得ることによって、「すごくいい学校になってきたね」という評価をいただいたという経験もあります。今では、人気も高い学校になっています。

幸ひ練馬高校もいますごくいい学校になっているので、そういったところでPTAの方、保護者との信頼関係を結んでいくということが必要だと感じています。話はずれますが、現在1学年の担任をやっている40人の生徒がいるのですが、この夏休みに40人全部の家庭に連絡をして、「学校の様子と家庭の様子」という情報交換をしている途中です。小さな取り組みではありますが、普段コミュニケーションができない保護者との関係を図るようになっています。このようにまず学校が誠意を見せるというところから、地域への連携につなげていけるよう考えながらやっているところもございます。

池田 はい、ありがとうございました。それでは山方先生、お願いします。

山方 「地域を巻き込む」という能動態で書いてあるのですが私、状況はいま逆なのだと思います。高校をどう巻き込むかというのが地域の人、考えていますので、「巻き込まれる」のですよ。例えば奨学金をもらった大学生はボランティアを義務づけるということでも真面目に話していますし、大学には地域貢献をさせるということを義務づけるという話もあります。これが高校に来る可能性も十分あると思うのです。

ですので、受け身になった安い労働力の下請けとか、それから大学生もいるだけで賑やかでいいのです。でも、そういうのがいままでの活動で多すぎるのですよ。イベントに駆り出されるというのがいまいちばん多いのですけれども、生徒は「いやだ」と言っています。いるだけでいいというのは、地域がそうですけど、放置される側の身にもなってほしいというか。本当にそうですよ、1日放置されて「二度と行かない」という場合がありますのでね。いまだから巻き込まれる状況のなかで主体性をどう学校が持つか。だからどういうふうな子どもを育てたいかとか学校が持たないと、非常に危ないと思っています。

それからもう一つ、地域、地域って言われるのは私、ちょっと反対するわけです。私もNGOをやっていたので、よく言われるのですよ、「山方さん、東アフリカの飢餓がこうなっていますよ」とか。2年前のいま頃はユニセフ学習をしていましたけど、東日本大震災があつて地域のこととかに集中するのもいいのですが、あまりにも目の届く範囲内ではなくて、もっと想像力のあるようなことをしたいと。

それから最後、経験のことなのですけれども、メディアリテラシー、ボランティアリテラシーではないのですけれども、「これが本当にボランティアか」というのをみんな議論する、話し合うというのは社会科の授業でします。ボランティアしつつ、いま自分がやっていることは何かという議論をする。それから後、丸投げせず、できるだけ私も現場に行つて生徒と話をするのは。「こんな状態でいいのだろうか」とか疑問形ですね、疑問とか質問をぶつけていって、これでいいのかと言うと生徒は考えます。

一番まずいのは体験だけさせる、よく言うのは平和学習なら広島連れていけとか、ホームレスを理解するのだったら東京都庁へ連れていけというのですけれども、差別意識持って帰るだけです。ホームレスの人が汚い臭いとか、原爆の放射線の風評被害だけで、だからどう大人のほうが力をつけるかというのを考えないとまずいと思っています。以上です。

池田 はい、ありがとうございました。では、どうぞ続いてお願いします。

竹田 「地域を巻き込む」ということですが、やはり地域に役立つものは何かというところをまず最初にきちっとリサーチしないと、奉仕活動はうまくいかないと思うのですね。五日市高校などは夜ですから。

最初は「奉仕活動、何やろうかな」と考えたときに、ふと思うのはやはり清掃活動ですとか、あとは夜回りですとか、そんなことをまず考えるわけです。生徒が「夜回りしたい」と言うから消防署のほうにまず相談に行ったのですね。そうしたら消防署は大賛成なわけですよ。「いいアイデアだね」と言ってくれたのです。

それでさてやろうかなと思って準備しているところに、ちょうど校長室のところにその地域の町内会の会長さんが偶然来たので説明すると、「夜回りはやめてくれ」って言うのです。「どうしてです

か」と言ったら、夜の8時にもう寝静まっている。そこでカチンコ叩いてカチン、カチンとか、火用心ではないけど、ゴミ拾ってといっても、「おたくの生徒だったら、悪いけど、ゴミ集めるどころか散らかしてしまうのではないか」などといろんなことを言われてしまうのですね。ああ、そうか。うちの学校は評判も良くなってきたので、いまなら賛成してくれるかもしれないですけど、その時期なんかだと、やはり、ああ、これは無理だなと。

では、逆に地域の方に助けてもらいながら活動するものは何かないか。それで先ほど言ったように環境を見ると、山が多くて、そこに特別養護老人ホームがいっぱいあるわけです。10以上あるのです。土地が安いせいですが、ともかくいっぱいあるのです。そうすると、では、そこに還元するには何がいいかなあと考えて辿り着いたのが音訳とか音読の指導なのですね。

次に今度は特別養護老人ホームがあってそういう活動をするとなると、ふと思ったのはやはり音訳をやっている方って近所にいるわけです。『市報』だとか何かを読んだり何かする人たちもたくさんいるのですね。では、そういう人たちに助けてもらいながらやらないと、こちらプロパーではないから音訳なんかわからないですよ。音訳もやはり真剣にやると奥が深くて、アクセントですとか、本式にやるとなると腹式呼吸なんかをやりながらやるとか、イントネーションがどうのとか、そういう勉強もいろんな辞書を使ってやらなきゃいけないというのがだんだん学習するとわかってくるのですが、そういうようなことを考えて地域を巻き込むとなると、その場所、場所に応じたもので考えてヒットさせるようなものを選ばなければいけないと思いました。

それからもう一つ、経験をどう教師として仕立て直していくかという話ですけども、やはり講演会だとか、あるいはうちで言う体験学習をやるにあたって外部の方からの協力をいただく場合には、仕掛けとして、こちらの狙いをしっかりとそういう人たちに伝えないとだめだと思うのです。中途半端に「おまかせします」とか言うと、こちらの目的とずれてしまう部分があるので、結果的にあまりいいものが出てこない。こちらが「こういうものを求めている」というのをはっきり言って、それで引き受けてくれればお願いするということをまずしっかりとしないと、あまりいい形にならないのかなと。

あともう一つは、それを実現するにあたって、こちらのほうも柔軟に対応できるような体制をつくらなければだめだと思うのです。奉仕活動というのは何人かの限られた教員だけでやっていくのではなくて、僕ももうそろそろ50過ぎているのですけれども、若い先生、中堅どころの先生もそうだけれども、やはり引き継いでくれる先生、若い先生の力をかりて、年配者がこうしてやっていると、若い先生も「あの人がやっているなら、おれもやってみようかな」という気持ちになってくれるのですね。失敗しながらやるから何か見ている面白そうだなと思ってくれるのですね。

また話を戻しますが、柔軟というところで言うと、外部の人たちとうまくやるには、ネックになるのはお金なのです。ただでは人は動いてくれないです。講演会一つにやるにしても、学校の決められた少ない予算でやるにしても、それなりのメジャーな人を呼ぶとそれなりにそういう人たちは必ず何かしら求めてきます。「こういう機材はあるのか」とか「こういうソフトがあるのか」とか。体験学習などをやっているとき、音訳のソフトなどは2、3万するのです。

だからたぶん奉仕活動をするにはお金もかかるから、来年度に向けて前年度の段階で内部の学校の事務長とか校長先生に「こういう活動、こういう目的でこうするのだ」ということを話して、ある程度、予算を確保しておかないとなかなか実現ができないのは、いままでの経験上あったので、それは間違いないように仕掛けとして少し考えているところです。以上です。

池田 はい、ありがとうございました。それでは続けて藤田先生、お願いいたします。

藤田 「地域を巻き込む」ということで言います。それは私自身がいろんなことに興味をもって、その人がどうしてそういうことをしているのだろう、どうしてそういう思いで動いているのだろう、ということを教師自身が関心をもってその活動に自分で参加をする、まずここだと思います。

地域の人というか、学校の周りの人や、地域に限らないと思うのですが、それぞれいろんな思いをもって活動されています。その方が「なぜそういうことをやっているのか？」というふうに、関心をもってくれることによって、その方も「実はこういうことでやっているのだ」とお話をしていたり、「もともとミッションは違うけれども、そういうことだったら高校生の育成のために、いいよ、おれは一肌脱いであげるよ」という人は、私は日本にいっぱいいると思います。ですので、まず、自分自身がいろんなことに関心をもつことかなと思います。

先ほど「クラスに東北の写真家の方お2人来ていただきました」と言いました。そのなかのお1人は、日本人の女性として初めて世界で2番目に高い山、「K2」に初登頂した人でした。この後、いろんな関係があって、今年11月に講演をしていただきます。それはもちろん別途のことですので、講演料はPTAの方とかいろんなところを工面して準備します。だけど、このときは、そんなすごい人と私はぜんぜん思っていないで、来ていただきました。私が渡したのはコーヒーゼリー二つです。「生徒と一緒に食べて下さい」といって生徒と一緒に食べてもらいました。でも、とても気持ちよく帰って行っていただきました。

なので、1回目は同じ方向を向いて動いていけば、私はいろんな人は動いてくれると思います。2回目、3回目と継続するときには、もちろん学校のなかで予算を組むとか、そういうことは必要だと思いますが、私は、1回目には教員の思い、生徒の思いで行けると思っています。だから芦花高校の生徒さん、「この人、すごいのだ」と思ったら、先生に言うの、「この人、呼びたい」と。そうしたら来てくれます。1回目は大丈夫です。なので、ぜひそういう思いをもっていろいろ動いてもらうといいのかな。私はそういうふうに地域を巻き込むというのは思っています。以上です。

池田 はい、ありがとうございました。まとめはできませんが、振り返りをしてみたいと思います。

午前中からの事例の報告、そしていまのご報告、また意見交換のなかで幾つものことが明らかになってきたなと思っております。今日おいでいただいているご発表の学校の先生方、そしてまたフロア皆さまは体験学習の重要性を強く認識されていらっしゃると思いますが、何回も出ていたと思いますが、一つだけの答えを求めない学びということがこの体験の学習にはある。それはあえていえば、教科の体系に基づく教科学習とは異なる面がある。しかし、それは二つの別のものではなくて、それがつながるような学習にしましょうというところに総合の狙い、意義がもともとあると了解をされていることだと思えます。

しかし、それを具体的にどんなふうに学校で形にしていくのかということが「地域を巻き込む」とか、「地域と連携する」とか、いろんな言い方をするなかでの大きな課題になっているのかなと思います。具体的にどうしたらいいのか、またはどうしているのかということで申し上げますと、今日のご発表のなかにもありましたけれども、さまざまな方々と出会う、関わる、知り合いになる、したがって、地域で挨拶する関係が生まれる、ということを生み出すそのきっかけをいかに提示できたか、または生徒たちがそれを掴み得たか、きっかけを私たちがどれだけたくさん用意できるか。これは一つの体験をやれば、全員が何かになるなどということは、体験学習としてはあり得ないこと

だと思えます。したがって、さまざまな工夫、すべてのご発表のなかにありましたけれども、グループで取り組む、または個人で課題を見つける、選択をする。とにかく自分自身が選ぶというその機会が設けられていたと思えます。

それを通じてきっかけを得て多様な人びとと係わるなかで、結果としては、最後に藤田先生がおっしゃったように、「呼びたいと思う人、呼んだらいいですよ」というのは象徴的な、または本当の言い方だと思いますが、なりたい人に出会うといいますか、こんな人になりたいなあという人に本当に会えるという。それがAKBの誰かでもいいですけども、それ以外の誰か、「あっ、この人、このような素晴らしい方だったのですか」と後で気づくということも先ほどのお話にあったと思えます。

残念ながら学校のなかの学びでは、直接、内面的な出会いが限られているわけでありますので、その機会は、先生方の地域を耕しながら行う実践の中で地域の素晴らしい方に出会う、または世界的に素晴らしい方に出会う機会を見出し得る。重要な他者と出会う機会、モデルになる人に出会う。

これはあえてつなげて言ってしまいますと、キャリア教育が大事だと言われている、そのキャリアに実はつながる話だというのは皆さん、ご了解されていることではないかと思えます。就職とか将来の自分をデザインしなければいけないからというよりは、まさに堀田先生のお話にもありましたけれども、その人自身の存在に気づく、自分自身に気づくというところから。そのためには鑑となる人と出会うということが本当に大事なのかなということを皆さんのご報告から思いました。

そして3番目になるのですが、学び合う関係づくりというのがとても大事なのだなということを教えていただいたと思えます。学び合う関係は多くの活動の事例発表のなかにありましたけれども、生徒同士というのがありましたし、生徒と先生が一緒にというのもあったと思えます。それから先生同士という場面もあったのではないかと。または先生同士が啓発し合うような機会をいかにつくったらいいか、もっとつくりたいというお話もお話のなかにありました。

もちろんそれは「地域を巻き込む」という今日のテーマでいえば、地域の方々と一緒に学び合う機会をどのように見出すのか。「学び合う」というと、何か教室で講義するというイメージの方もいるかもしれませんが、そうではなくて、自然に出会った人との係わりのなかから豊かなものを得ていくという機会、学び合う関係づくりというのがとても大事だというご提示があったと思えます。

そして質問としてご指摘いただきましたけれども、学校教育としては何をいかに成果として評価し、位置づけているのか。このことについては、香山先生のところの事例のなかでも本当に精緻な評価へのレンジをされているというご報告を資料としてもいただいておりますし、生徒たちの豊かな学びがあればあるほど私たちは試行錯誤を検討していかなければいけないのだなということを教えていただいたと思っています。

そしてあえて申し上げれば、何人かの方から「地域を巻き込むというのは、地域に巻き込まれるということでは必ずしもなくて」という話がありましたが、逆に言えば、地域と学校を対立的に考えるというだけではなくて、地域のなかの学校であったり、または地域の方にとっては自分たちの財産としての学校、自分たちの誇るべき地域の存在としての学校となるような、学校と地域の手を結び合うような関係づくり。言葉で言うのは簡単かもしれませんが、それを具体的に実現していくのは、生徒たちの体験学習が学校のなかだけで完結しないということなのかもしれないと、今日のお話を伺って思いました。

それは「この話、市長さんに聞いてもらったらいいいよね」という一つの例からもそのようなことを思えます。つまり、学校教育の時間や評価やその範囲のなかにとどまらない学びを、生徒たちが卒業生になっても「また一緒にやりたい」と言ってくるというまちづくり、ここに学校が寄与するという

可能性を持っているなど思っているところです。

今日は限られた時間のなかで6名の方にここにお座りいただきましてマイクを回らせていただきました。またフロアの皆さんからも、限られた方々からでありましたが、質問をいただくようなことの時間を少しだけ持たせていただきました。登壇していただきました6名の方に感謝申し上げて拍手で閉じたいと思います。どうも皆さん、ありがとうございました（拍手）。